Osaka University Knowledge Archive

Title	職員・教員・TA 協働による学修支援の取組 : 大阪大学附属図書館における「レポートの書き方講座」を中心に
Author(s)	末田, 真樹子; 堀, 一成; 久保山, 健 他
Citation	大阪大学高等教育研究. 2014, 2, p. 55-60
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/28096
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

大阪大学高等教育研究　2（2013），55−60

【教育実践レポート】

職員・教員・TA協働による学修支援の取組

― 大阪大学附属図書館における「レポートの書き方講座」を中心に ―

末田　真樹子[※1]・堀　　一成[※2]・久保山　健[※1]・坂尻　彰宏[※2]

Collaborative works between library staffs, faculty members and teaching assistants: The report of “workshop for report writing” in Osaka University Library

Makiko SUEDA[※1], Kazunari HORI[※2], Takeshi KUBOYAMA[※1], and Akihiro SAKAJIRI[※2]

This paper describes the “workshop for report writing” as an example of collaborative work between library staffs, faculty members and teaching assitants, and report on its practice and challenges for the future. In recent years, many university libraries have been working on learning support activities while cooperating with faculty members. In Osaka University Library, we have been working learning support activities such as provision of a place for learning and human supports. For example, workshops with Center for Education in Liberal Arts and Sciences, support for class and co-sponsored events with students. Since 2010, Osaka University Library has held workshops to learn academic skills. The “workshop for report writing” is one of them, and it was renewed in 2012, and has the following feature : Co-operation with faculty members, library staffs and teaching assistants. Library staffs give lectures and facilitate group work.

Keywords : Learning support activities, Collaborative works, Writing supports, Learning commons

1　はじめに

本稿では，図書館職員がライティング教育支援全般に関わることで，学修支援に踏み込んで関わる機会を得るとともに，既存の図書館業務の幅を広げることになった事例を紹介する．この取組の特徴として職員，教員，学生が協働した活動であることがあげられる．その一例として「レポートの書き方講座」を取り上げ，その実践事例と今後の課題について報告する．

大阪大学では4館で構成された附属図書館のうち，平成21年に総合図書館と理工学図書館，平成24年に外国学図書館，平成26年に生命科学図書館（予定）に共同学習スペースであるラーニング・コモンズを設置した．コモンズスペースを有効な学習の「場」として提供することに加え，人的サービスにも取り組んでいる．

2　背景

現在，各大学図書館において学部学生に対するライティング教育支援が盛んである．この背景には，学修支援において，大学図書館が果たす役割が期待されていることがある．平成22年の文部科学省科学技術・学術審議会による審議のまとめにおいて，学習支援及び教育活動への関与の例として「ライティングセンターの講義や演習を実施すること」があげられた[1)]．平成24年の中央教育審議会からの答申[2)]では，主体的な学修の基盤のひとつとして，図書館の機能強化（図書館の充実や開館時間の延長，学生による協働学修の場の整備）が言及された．

所　属：[※1]附属図書館　[※2]全学教育推進機構
Affiliation :[※1] Osaka University Library　[※2] Center for Education in Liberal Arts and Sciences
連絡先：hsanko02@library.osaka-u.ac.jp（末田真樹子）

さらに平成25年，科学技術・学術審議会 学術分科会学術情報委員会による「学修環境充実のための学術情報基盤の整備について（審議まとめ）」[3] によると，学修環境の充実のために，「コンテンツ」「学習空間」「人的支援」の3つ要素から構成される，学術情報基盤の整備が課題としてあげられている．特に正課授業外の主体的な学びを支援するために，学術情報基盤としての大学図書館の整備と活用が求められている．また同まとめ（7ページ）には「アクティブ・ラーニングの推進等，図書館の果たす役割の変化に伴い，様々な学修を支援する活動の企画・実施を担当する専門職として，教員や他の職員とも異なる中間職的な人材が必要になる．専門職の役割は，各大学で設置が進みつつあるURA（リサーチ・アドミニストレーター）的な性格となるが，こうした企画は，主に教員と図書館職員との協力で行われることから，その過程を通じて，図書館員の中から育成されるようなシステムを構築する必要がある．」と記載があるように，職員が教育に積極的に関わる活動が求められている．

大学図書館における学修支援は，ライティング教育支援に関する具体的な実践例としてはガイダンスの実施，サポートデスクの設置，パスファインダーやブックリストの作成など，取り組み方やその内容は様々である．それらは図書館のみで取り組んでいるのではなく，教員あるいは大学院生とともに，ガイダンスやサポートデスクの活動を行っている場合が多い．

サポートデスクの設置例として，国際基督教大学では，平成22年より図書館内にライティングサポートデスクを設置した[4) 5)]．大学院生がチューターとして採用され，学部生は1回40分の予約制セッションを受けることができる．広島大学でも，平成25年度より，中央図書館にライティングセンターが設置され，チューターによる支援が行われている[6)]．

またいくつかの大学では，教員が行う授業や講習会を図書館内で開催している．名古屋大学では，高等教育研究センターと附属図書館が「レポート書き方講座」を共催している[7)]．一橋大学では「テーマ設定やレポートの構成，先行研究の引用方法など」といったレポートの書き方を附属図書館の専門助手2名と大学教育研究開発センターの教員が担当し，資料の探し方を図書館職員2名が担当するという役割分担が行われている[8)]．富山大学でも，「レポート・論文の書き方」と「文献（資料）の探し方」を同時開催し，前者を教員が，後者を職員が担当している．この資料は機関リポジトリ上で公開されている[9)]．

上記のような取組において図書館職員の役割は，ライティング教育支援以前より取り組まれてきた情報検索法が中心になっている．

3　取組の概要

大阪大学では教員と協働することで，職員もより教育に資する役割を担う活動を行っている．

教員や学生と協働した学修支援について，大阪大学総合図書館での活動を中心に報告する．主な内容は講習会，授業のサポート，イベントの共催・協力に大別できる．本稿では講習会のひとつである「レポートの書き方講座」を中心に報告する．講習会の特徴は以下の3点である．

1. 職員と教員，学生が連携している
2. 職員が講師役としても関わる
3. グループワークや演習を中心としている

その他についても簡単に紹介したい．まず，授業へのサポートとして，場所の提供と職員の講師派遣を行っている．

前者はラーニング・コモンズやグローバル・コモンズの一区画を授業の場として提供し，授業に必要なプロジェクタ，ホワイトボード等を貸出している．全コマを図書館で実施するものもあるが，ほとんどの場合，数回のコマを図書館で行う形である．

後者は図書館職員が授業の一部を，講師として担当する．これはラーニング・コモンズ開設以前より取り組んでおり，図書館における情報リテラシー教育活動のひとつとして位置づけられる．

次に，学生との協働として，ラーニング・コモンズおよびグローバル・コモンズをイベント利用のために提供，または広報，企画などの面で協力を行っている．

以下，講習会について概観する．総合図書館では，ライティングおよびリーディング支援として，「レポートの書き方講座」「論文の書き方＆文献の読み方　プチ・ゼミナール」，プレゼン支援として「プレゼン入門：話す基本技術」を実施している．本稿で報告する「レポートの書き方講座」はここに位置付けられる．前節で紹介した他大学の事例と同様に，自主参加型講習会であり，幅広い属性の学生が一度に集まりやすい利点を活用している．

3.1 レポートの書き方講座

総合図書館で開催する「レポートの書き方講座」は，正課授業外の自主参加型の講習会である．定員は1グループ15名で，事前申込制をとっている．広報対象を全学部1，2年生としているが，それ以外であっても大阪大学の学生であれば参加可能である．詳しくは次章以降で紹介したい．

3.2 論文の書き方＆文献の読み方　プチ・ゼミナール

「レポートの書き方講座」と同様に自主参加型講習会であり，学部3，4年生を対象に論文作成のプロセスを学ぶことを主な目的にしている．テキストは教員と附属図書館職員によって共同作成され，講師もその2名が担当する．「レポートの書き方講座」よりも小規模で，実習の多い内容になっている．詳細は『カレントアウェアネス』No. 310[10] を参照されたい．

3.3 プレゼン入門：話す基本技術

上記の講習会を発展，補完するものとして，人前でロジカルに話すことができるようになることを目的に，平成23年度より実施している．実施回数は全2コマである．希望者は発展編の1コマも追加受講することができる．この講習会は教員からのサポートを受けているが，講師はすべて図書館職員によって行われている．詳細は『大阪大学高等教育研究』No. 1[11] を参照されたい．

以下,「レポートの書き方講座」について詳しく述べる．この講習会は他の2つと比較して，低学年の参加を想定しており，大学入学後，はじめてレポート課題に取り組む大学生へのサポートを目的にしている．実際，平成25年度はのべ参加者のうち，86％が1年生であり，大学初年次における自主的な学びの機会という側面を持つ．

当初，この講習会は教員のみが講師を担当していた[12]．その後，職員と学生が講師役を担当するように進展した．本稿ではその後の進展と成果を報告したい．

4　レポートの書き方講座

「レポートの書き方講座」はラーニング・コモンズの完成をきっかけに誕生した．図書館長から大学教育実践センター（平成24年に全学教育推進機構に改組）に学修支援のイベントの依頼があり，それを受けて堀が，ライティング指導のアイディアをこのイベントとして立ち上げた．実施に至った経緯や初年度の取り組みについては『図書館界』63（3）[13] と『大阪大学大学教育実践センター紀要』No. 7[12] に譲り，本稿では平成25年度の実施成果を報告する．

表1　平成25年度実施概要

開催時期	平成25年6月～7月
実施形態	3グループ（定員15名）×3回
開催場所	総合図書館

基本的な役割分担は以下のとおりである．教員は教材作成および講師および講師補助を担当する．職員は広報や会場設営をはじめとする事務業務，講師および講師補助を担当する．図書館TAは講師，および講師補助を担当する．

ここで附属図書館TA（ティーチング・アシスタント）について簡単に説明しておく．附属図書館では，ラーニング・コモンズにTAを配置し，主に学習相談を担当している．総合図書館と理工学図書館にはラーニング・コモンズを開設した平成21年度，外国語図書館は平成24年度から配置している．総合図書館には6名のTAが従事している（平成25年11月現在）．

実施形態は1グループにつき，3回の連続講習会である．各回の内容と目標は下記のとおりである．

［第一回］パラグラフ・ライティング

レポートに対する基本的な考え方を理解する．内容のアウトラインを考える．パラグラフについて知る．

［第二回］引用のルールとマナー

他の人の成果を引用する場合の心がけ，読み方，正しく引用するためのWord操作法を理解する．

［第三回］レポートの形式を整える

レポートにふさわしい形式に整えるためのWord操作法を学ぶ

講習会は講師1名と，講師補助数名で担当する．平成25年度は堀（教員），末田（図書館職員），秋定（総合図書館TA/大学院生）が各グループを担当した．講師補助は上記3名のほか，久保山（職員）と坂尻（教員）が担当した．講師補助は受講者に対して作業の補助や，グループワークを活発に進めるために会話を促す役割を担っている．

講習会で，800字程度の模擬レポートを作成する作業を通じて，アカデミックライティングの基礎的な内容を学ぶことを目的にしている．

事前準備として，各自で作成する項目・テーマを考えおくように受講者に指示した．初回の講習会では項目タ

イトル，簡単な内容案，必要な情報，その他メモを互いに見せ合いながら，アウトラインを作り上げていくグループワークを行った（図1）.

図1 「レポートの書き方講座」グループワークの様子

講習会は講師からの説明だけではなく，学生同士で意見交換できる構成になっている．学部も学年も異なる学生が集まる場で，各自テーマも様々であった．グループワークは座席の隣同士で行ったため，初対面の組み合わせもあった．講師補助が声掛けをする場面もあったが，おおむねうまくコミュニケーションが取られていたように思う．講習会後のアンケートでは「色々な人との組み合わせでディスカッションがしたい」という意見も寄せられた.

5 工夫した点

5.1 実施回数・時間帯

曜日と時間帯を固定した連続講習会のため，なるべく参加しやすい時間帯を考慮した．そのために春学期に実施した図書館オリエンテーションの参加実績や全学共通教育科目の時間割をチェックした.

講習会は1グループ3回，毎週同じ時間帯に実施した．平成25年度は6月から7月にかけて，それぞれ月曜5限，木曜3限，木曜4限の時間帯で合計3グループ実施した.

平成23年度まで1グループの実施であったが，平成24年度より図書館職員と図書館TAが講師を担当することで，実施回数を増加させた.

教員以外が講師を担当するにあたり，職員とTAは事前に教員の講習会に講師補助として参加することで予習を行った.

5.2 場所の選定と活用

開催場所として総合図書館ラーニング・コモンズを活用することで，ラーニング・コモンズに学習する雰囲気作りを加える効果を狙った．ラーニング・コモンズ内のイスと机を講義形式に配置し，持ち運び式スクリーンに投影することで簡易な講習会スペースを設営した．その一方で，開催回数が多いことから，ラーニング・コモンズを利用する他の学生へ配慮し，館内の別の部屋も使用した（図2）.

図2 「レポートの書き方講座」の様子（TA 担当回）

第二回の講習会では，引用のマナーとともに情報検索について取り上げた.「感想文」とは異なるレポートには，資料よる根拠付けが必須であることを一次情報・二次情報の特徴と相違点を踏まえながら説明した．一次情報にたどり着くための二次情報として，参考図書を取り上げた.

さらに，実際に館内の参考図書コーナーに行き，請求記号を手掛かりに，必要な情報を探す実習を行った．講習会を図書館で行うことで，その場でスムーズに情報検索へ移行することが可能になる．また，テキストの構成も「調べる」と「書くこと」が密接に結びついていることや，資料を活用してレポートを書くことを印象づけるよう心掛けた[13].

5.3 広報の方法

主な手段はポスター（図3），ちらし，ウェブサイトを使用した．館内と館外（ガイダンス室，全学教育講義棟）にポスターを掲示，ちらしの配布，学務情報システム「KOAN」と図書館ウェブサイトにお知らせを掲載し，周知をはかった．また事前申込制であるため，前日にリマインダメールを送ることで，日程忘れを防ぐ工夫も行った.

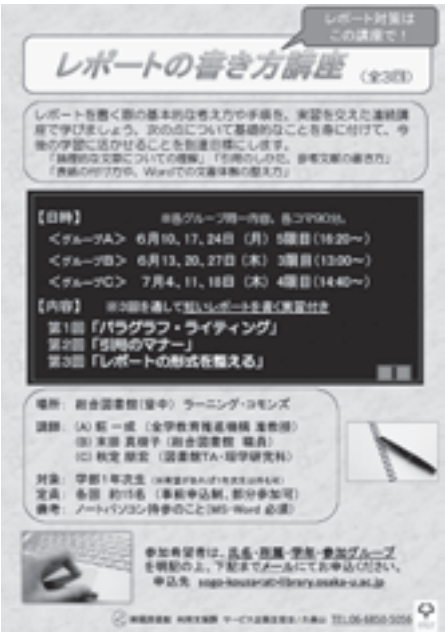

図3 「レポートの書き方講座」ポスター

5.4 レスポンスを積極的に取り入れる

定員15名という小規模の講習会であるため，その場で質疑応答しやすい規模であったが，講習会では毎回，アンケートをとった．これは1コマごとのパフォーマンスを把握すると同時に，その場では上らなかった受講者からの声を拾うことを狙いとした．寄せられた疑問のうち，頻度の高い疑問については次回の講義の素材とし，回答をした．さらに，疑問や感想を集めて「アンケートコメントに対するレスポンス」として，印刷・配布し，全員で話題を共有できるようにした．

6 成果・効果

(1) 参加人数の増加

職員とTAが講師を担当することにより，開催回数が増加した．全3グループの参加人数はのべ72名であった．また，時間帯についてもある程度，柔軟な対応ができるようになった．

(2) アンケート結果

毎回，受講者に難易度および有用度を問うアンケートを実施した．全体を通して難易度については，65％が5段階評価の「3. 普通」と回答し，適当であったと考えられる．有用度は5段階評価（3が普通）で，平均4.22という結果を得た．このことから，一定の有用度はあったと判断できる．全般的に満足度の高い評価が寄せられているのは，レスポンスを積極的に取り入れて，回答した効果と考えられる．

(3) 職員の立場から

学生がライティングにおいて，どのような課題を抱えているかを知ることができた点が大きく，レポートの書き方に関連した図書などもその都度紹介した．この経験をもとに，3節で紹介した授業へのサポートの一環として，ブックリスト「レポートを書くための本・図書館のサービス」[14] を追加し，講義の改善につながった．このブックリストを読んだ学生が，実際に図書館を訪れ，図書館TAからアドバイスを受けることがあった．

また，講師を担当し，カウンター以外に会話の機会を得ることで，学生とコミュニケーションが取りやすくなった．講習会に参加した学生の中には，別のイベントに参加した者もあった．

(4) 教員の立場から

学部1，2年生の参加を想定していたが，高学年の学生の参加も一定数あった．平成25年度のアンケートによると，参加人数のべ72名のうち，学部3年以上の参加は4名であった．

また，ライティング指導の潜在的な需要性を確認することができた．過去のアンケートで，短期の講習会ではなく，授業化の希望が出されたことで，平成24年度には基礎セミナー「はじめてのアカデミックライティング」を開講するきっかけにもなった．

(5) TAの立場から

TAが講師役を担当することで，所属を越えた学部学生と大学院生との新しいコミュニケーションの場が生まれた．まだゼミや研究室に所属していない学部1，2年生や，院生と交流する場所の少ない学部学生にとって，講習会は先輩の話を聞く機会になった．TAにとっても院生の立場ならではの話ができるよう，工夫をすることができた．

7 問題点・今後の課題

この講習会は，受講者がその後継続して学ぶためのきっかけづくりを目的としている．そのため，講習会後のフォローや成果が評価できていない点が課題としてあげられる．

次に，総合図書館という多様な学生が集まる場所で開催することで，普段は交流のない学生間の交流が生まれる一方，その多様性に対して，どこまでカバーできるのかという問題もあげられる．理系学部からは，理系科目で必要な実験や計算レポートについて学びたい，という意見が複数の受講者から寄せられた．

また，職員と教員との協働ついて，どのような協働の形で行うべきか今後，検討していく必要がある．

8　まとめ

本稿では，図書館職員，教員，学生が協働した学修支援の取り組みについて概観し，そのひとつである「レポートの書き方講座」について取り上げた．この講習会で，それぞれの役割を簡単にまとめる．

職員…事務，講師，講師補助
教員…教材作成，講師，講師補助
TA…講師，講師補助

この取組は他の事例と比較して，職員やTA（大学院生）が教員とほぼ同等な程度，講師役を担当し，積極的に参加学生と関わり，それぞれの立場で講習内容を工夫できた点が大きな特徴である．

その結果，参加した学生に対して，ライティングスキルの向上に一定の貢献ができたと考えられる．

また，受講者や講師を含めたコミュニケーションの促進効果があり，参加した学生同士，職員と学生，TA（大学院生）と学部生など多様な交流が生まれた．

附属図書館として学修支援に踏み込んで関わる機会を得て，業務の幅を広げることができた．職員としても講習会を通じて学生への理解を深めることができた．

しかしながら，より有意義な取組にするために，今回の経験を踏まえて，課題を検討していく必要がある．

ライティング教育支援活動は，図書館における利用教育や情報リテラシー教育活動と密接な関わりを持つ．授業としてのライティング指導も始まり，広まりつつある．現行のかたちをもとに，今後，図書館として，学生およびライティング指導をする教員にどのようなサポートができるのかを，同様の課題意識を持つ教員等と協力して，模索し続ける必要があると考える．

受付2013.11.22／受理2014.1.29

参考文献

1）　科学技術・学術審議会 学術分科会 研究環境基盤部会学術情報基盤作業部会．大学図書館の整備について（審議のまとめ）－変革する大学にあって求められる大学図書館像－（平成22年12月）．http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/toushin/1301602.htm，2010．参照：2013-11-21.
2）　中央教育審議会．新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）（平成24年8月28日）．http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm，2012．参照：2013-11-21.
3）　科学技術・学術審議会学術分科会学術情報委員会．「学修環境充実のための学術情報基盤の整備について（審議まとめ）」について（平成25年8月21日）．http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/25/08/1338778.htm，2013．参照：2013-11-21.
4）　畠山珠美．ライティング・センター：構想から実現へ（特集 ラーニングコモンズと利用者サポート）．情報の科学と技術，Vol. 61, No. 12, pp. 483-488, 2011.
5）　利根川樹美子．ライティングサポートデスク：国際基督教大学図書館のラーニングコモンズの機能（特集 大学図書館の学習支援）．大学の図書館，Vol. 31, No. 11, pp. 190-192, 2012.
6）　広島大学．広島大学ライティングセンター．http://www.hiroshima-u.ac.jp/wrc/，2013．参照：2013-11-21.
7）　名古屋大学高等教育研究センター．学部生対象各種研修会．http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/service/ug/．参照：2013-11-21.
8）　杉岳志．一橋大学における図書館と教員の協働・図書館職員と専門助手の協働．大学図書館研究，Vol. 96, pp. 16-22, 2012.
9）　富山大学附属図書館．中央図書館講習会「レポート・論文の書き方」,「文献の探し方・入手方法」資料を公開しました。http://u-toyamalib.blogspot.jp/2013/01/blog-post.html，2013．参照：2013-11-21.
10）　赤井規晃．大学図書館とライティング教育支援．カレントアウェアネス，No. 310, pp. 2-5, 2011.
11）　久保山健．図書館スタッフによる学習支援の実践：「プレゼン入門 話す基本技術」．大阪大学高等教育研究，No. 1, pp. 77-83, 2013.
12）　堀一成．附属図書館ラーニング・コモンズを利用した教育実践の試み．大阪大学大学教育実践センター紀要，No. 7, pp. 81-84, 2011.
13）　上原恵美，赤井規晃，堀一成．ラーニング・コモンズ：そこで何をするのか，何がやれるのか．図書館界，Vol. 63, No. 3, pp. 254-259, 2011.
14）　大阪大学附属図書館．レポートを書くための本・図書館のサービス．http://www.library.osaka-u.ac.jp/doc/book_lists_and_services_for_report_writing.pdf，2013．参照：2013-11-21.